

私を研究者として歩ませた言霊

第七回 松永幸大

(東京理科大学理工学部・准教授)

私の経歴については、編集長を務めた「顕」に、「研究者の歩み」を書いて既に2012年5月に出版した。興味のある方は国立国会図書館で閲覧していただきたい(本館・総合閲覧室・請求書番号 GK77-J112、関西・総合閲覧室・請求書番号 XD-N12-388)。「研究者の心得」は、松永研究室 HP (「理科大、松永」で検索してください。) 中に“研究室ポリシー”として公開しており、多くの方々から励ましの言葉をいただいている。そこで今回はちょっと変わった趣で、私が研究者として歩んできたときに、心に残った言葉を取り上げて、「研究者としての歩み」を書いてみることにした。

1. 「研究は、仕事を通して自己を理解し表現することができる数少ない職業の一つである」

ロジェ・ギルマン博士とアンドリュー・ウィクター・シャリー博士の脳内ホルモン発見を巡った壮絶な研究競争を描いた「ノーベル賞の決闘」に出てくるクルーリッヒ博士の言葉である。大学院生の時に見つけてから、ずっと切り取ったコピーをデスクに貼っている。私も、研究を通じて日々自己を見つめ返している。

2. 「発見がすべて」

博士号の指導教官である黒岩常祥先生の言葉である。サイエンスの基本は世界の誰も知らない事柄や物質、現象を見つけ出すことである。そして、その発見を成し遂げたとき、世界の中で自分しか知らないという何とも言えない高揚したワクワクした体験が研究の原動力となる。どんなに忙しい時でも顕微鏡を覗き込み、自ら新発見に挑み続ける師の背中から学んだ研究者の基本である。

3. 「新しいことがわかったか？」

工学部在籍時、町田泰則先生の特定領域「植物メリステム」公募班に入れて頂き、植物研究者の方々に惜しみない援助をいただいた。おかげで基礎研究を継続できた。神戸百周年記念館の研究報告会が散会になった時、福田裕穂先生が私の席までいらっしゃり、御助言をくださった。

「イメージング色々工夫してやるのはいいんだけどさ。それで結局、何か新しいことがわかったわけ？」

郷に入り手は郷に従えと首まで工学部の「バイオテクノロジー」にどっぷり浸っていた私。やれ特許だ、やれ産学連携だ、とサイエンスの基本を忘れかけていた私。そんな私に活を入れ、覚醒させた、シンプルだが重みのある言葉であった。

PIとして独立して、ようやく基礎研究に没頭できる環境になった。長い長い道のりであった。論文原稿を作成するとき、上記2「発見がすべて」と共に常に自問自答し、反芻している。「この論文内容は本当に新発見を含んでいるか？新しいことが本当に分かったのか？」

4. 「山と谷はつながっている。今日の順境で過ちを犯せば、明日の逆境をつくりだす。そして、今日の逆境で賢明なことを行えば、明日の順境をつくり出す。」

「チーズはどこへ消えた？」の名著で知られるスペンサー・ジョンソン博士が書いた「頂きはどこにある？」の要諦である。逆境にいて愚痴をこぼして前進しない人と、逆境から学び、いつかやってくるであろう順境を信じて一歩ずつ前進する人。いったいどちらの人が豊かな人生を過ごせるのだろうか？どんな逆境でも、基本に立ち返り、最も大事なことに専念すれば、事態を好転させることができる。

関西から関東への異動の際、関西の弟子達 25 人がホテルで壮行会を開催してくれた。その御礼に、「頂きはどこにある？」を 1 冊づつプレゼントとして手渡した。今でも弟子達から「時々、読み返しています。苦境にあってもいい点を探し、進んで新しいチャンスを求め、よりよいものを見つけようとしています。」と言われ嬉しいものである。

5. 「黒い玉をみせられて、白だろとって、白といわせられることもある。いや、黒だっついはいはって、怒られることもある。そりゃ理不尽だ。だけど、世の中ってのは、理不尽の塊。」

伊集院静氏の「大人の流儀」に出てくる言葉である。この理不尽さを分かってこそ、「大人」なのである。残念なことに、世の中には「大人」になれない人が多い。サイエンスは理詰めの世界だから、科学を生業にしている身に理不尽さは、ひとときわキツイと感じるものである。ただ、いつかは「ほら、黒い玉はやっぱり黒だっただろ！」と動かぬ証拠で、真理に迫れる数少ない職業だと思う。

6. 「成功とは、失敗から失敗へと情熱を失わずに進む能力である」

戦略を練って、実験を何年も積み重ね、結果もばっちり出た。さあ、トップジャーナル目指して投稿だ！と意気揚々としている時、新着の雑誌に掲載された同様の論文を見て「ガーン」と奈落の底に落ちるといった体験は誰にでもあるであろう。繰り返し実験をしても失敗してデータが出ない時もある。指摘事項に即して何度も論文原稿を改訂し、山のような追加データを足して再投稿しても、審査員からリジェクトを突きつけられることもある。そんな時に思い返す言葉が、宰相ウィンストン・チャーチルの遺してくれたこの名言である。

7. 「未来を予言する最良の方法は自らそれを作り出すことである」

パーソナルコンピューターの概念を提唱したアラン・カーティス・ケイ博士の言葉である。夢は自らの力で叶えるものであり、目標を達成するには自らが動かなければならない。自分の明日は、この瞬間の自らの行動で決まる。自らを突き動かすときに、発破の言葉として唱えている。

叱咤激励して下さった多数の先生方、忌憚のない意見と惜しみない援助を与えてくれる研究者仲間、喜怒哀楽を交えて共に研究してきた（いる）大学院生の皆さん。多くの方々のおかげで、今日も植物の基礎研究ができる。本当に有り難く幸せなことと、日々、感謝している。

皆様の研究生活が充実したものになりますように、願っております。

松永幸大 拝

著者紹介

1993年東京大学理学部卒、1998年同理学系研究科博士課程修了・博士（理学）。

日本学術振興会 PD 特別研究員、ノースキャロライナ大学チャペルヒル校理学部博士研究員を経て、2000年東京大学大学院新領域創成科学研究科・助手、2002年大阪大学大学院工学研究科・講師、2008年大阪大学大学院工学研究科・准教授、2011年4月より現職。現在の研究テーマは生命動態学。